

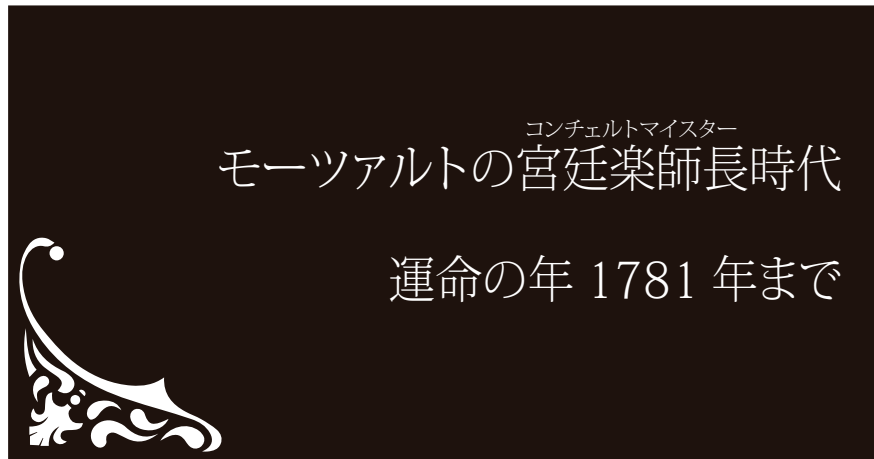
Kobe City Chamber Orchestra

神戸市室内合奏団 定期演奏会

音楽は言葉

～それぞれの時代から 作品たちが語りかける～

神戸市演奏協会 第395回公演



2014年5月31日(土) 14:00 開演

神戸文化ホール 中ホール



主催：(公財) 神戸市演奏協会・神戸市・(公財) 神戸市民文化振興財団 神戸文化ホール

<プログラム>

W.A.Mozart

ディヴェルティメント ニ長調 KV136(125^a)

Divertimento für zwei Violinen,Viola und Baß D-Dur, KV136(125^a)

I . Allegro

II . Andante

III . Presto

ヴァイオリンと管弦楽の為のロンド 変ロ長調 KV269(261^a)

Rondo für Violine und Orchester B-Dur, KV269(261^a)

RONDEAUX:Allegro

ヴァイオリンと管弦楽の為のアダージョ ホ長調 KV261

Adagio für Violine und Orchester E-Dur, KV261

Adagio

ヴァイオリンと管弦楽の為のロンド ハ長調 KV373

Rondo für Violine und Orchester C-Dur, KV373

RONDO:Allegretto grazioso

<休憩>

ディヴェルティメント ニ長調 KV334(320^b)

Divertimento für zwei Hörner,zwei Violinen,Viola und Baß D-Dur, KV334(320^b)

I . Allegro

II . Teme con variazioni : Andante

III. MENUETTO

IV. Adagio

V . MENUETTO

VI. RONDO : Allegro

プログラム・ノート

中村 孝義
(大阪音楽大学教授・音楽学)

岡山潔音楽監督は、神戸市室内合奏団の平成26年度のシーズン・プログラムを「音楽は言葉 それぞれの時代から作品たちが語りかける」と定められた。いつもながら、音楽に関わるものすべて（作曲するものも、演奏するものも、聴くものも）が常に心に留めおかねばならない、きわめて意味深いコンセプトだ。

よく音楽は万国共通の言葉だなどということがまことしやかに囁かれる。しかしここには大きな誤解が含まれている。音や音楽というものが、たまたま具体的なものや概念を指し示すことができない抽象的なものであるということ逆手にとって、世界中の全ての人々が、様々な地域や時代に生まれた音や音楽を、同じように理解することができると思うのは、実に浅はかなことである。音楽というものは、それが生まれた地域や時代の言葉や語法、さらには発想法ときわめて親密な関係にあり、それを知らないで奏でたり聴いたりした時、大きな誤謬を犯す可能性があるのだ。

例えばごくごく簡単にお分かりいただくためにちょっと極端に説明すれば、石川さゆりが演歌を歌うような歌い口でモーツァルトを歌ったとしたら、それがモーツァルトにならないことはどなたにもすぐにお分かりいただけるだろう。同じ音楽であっても、演歌には演歌の、モーツァルトにはモーツァルトの語法や歌い口があり、それを守らねば演歌にもモーツァルトにもならないし、聴く方だってそれを知らなければ、それらが伝えようとすることを的確に理解することはできないのだ。（このことについては、私の近著『音楽の窓』 [河合楽器製作所・出版事業部, 2012年]をお読みいただければ、さらに深くご理解いただける）。

その意味で、岡山監督が「音楽は言葉」といわれたのはまさにその通りであり、各時代も、各地域も、また各作曲家も、独自の言葉でメッセージを発していることを改めて再認識し、それらを理解した上で奏でたり、聴いたりすることが重要だということである。

今回は、まずモーツァルトの音楽が集中して取り上げられるが、ウィーン・フィルの第1コンサートマスターとして活躍するホーネックがリードする今日の演奏会をお聴きになれば、モーツァルトの音楽こそ、その繊細かつ緻密な語法を理解しないでは、真のモーツァルトにはならないことを徹底して知らしめられることになるだろう。

W.A.モーツァルト：ディヴェルティメント 二長調 KV136(125 a)

Wolfgang Amadeus Mozart : Divertimento für zwei Violinen, Viola und Baß D-Dur, KV136(125^a)

今日最初に演奏されるのは、誰もがその世界に即座に吸い込まれざるを得ないような流麗で美しい旋律で始まる「ディヴェルティメント 二長調」。ディヴェルティメントやセレナードと呼ばれる管弦楽曲は、交響曲が、基本的には4楽章構成の整った構成を持ち、各楽章で用いられる形式にも一定の約束事があった(もちろん例外はあるが)のに対して、楽章数に関しても、また各楽章に用いられる形式や楽器編成も、ある程度の決まりはあったにしても、より自由で、たいていの場合何か特定の慶事などの機会のためにただ一回演奏するために作曲された。この作品は16歳(1772年)のとき、ザルツブルクで作曲された作品で、現在ではディヴェルティメントと呼ばれているが、これはモーツァルト自身の表記によるものではなく、どのような目的のために作曲されたのかは不明である。しかも編成に関して、弦楽四重奏を意図していたのか弦楽合奏を想定していたのかも研究者の間で意見が分かれており、現在もジャンルが明確でない作品の一つである。

ただ誰かがこの作品をディヴェルティメント(喜遊曲)と呼びたくなったように、音楽は喜悦感や優雅

な表情にあふれ、しかもどのようなフレーズにもきめ細やかな情感が豊かに滲えられており、一度耳にすれば忘れられない美しさにあふれている。穏やかな雰囲気の中に、優雅な音楽が展開されるアレグロのソナタ形式による第1楽章、簡易なソナタ形式にもとづく、しっとりとした美しさにあふれるアンダンテによる緩徐楽章の第2楽章、軽快で活発な主題を中心に澁刺とした音楽が展開される、やはりソナタ形式によるプレストの第3楽章の、3つの楽章からなる。

W.A. モーツァルト：ヴァイオリンと管弦楽の為のロンド 変ロ長調 K.269(261^a)

Wolfgang Amadeus Mozart : Rondo für Violine und Orchester B-Dur, KV269(261^a)

W.A. モーツァルト：ヴァイオリンと管弦楽の為のアダージョ ホ長調 KV261

Wolfgang Amadeus Mozart : Adagio für Violine und Orchester E-Dur, KV261

W.A. モーツァルト：ヴァイオリンと管弦楽の為のロンド ハ長調 KV373

Wolfgang Amadeus Mozart : Rondo für Violine und Orchester C-Dur, KV373

モーツァルトは協奏曲というジャンルがお気に入りであった。それは27曲も残されたピアノ協奏曲を始め、ヴァイオリン協奏曲、管楽器を独奏とする様々な協奏曲をみれば、明らかだろう。愛をはじめとする人間の諸相を音楽で表現することに大きな関心があったモーツァルトにしてみれば、独奏楽器とオーケストラ、さらにはオーケストラの様々な楽器が、時に対話をしたり、競ったりしながら、全体として大きく調和していく協奏曲という作曲様式は、人間の諸相を表現するにはうってつけであったからである。

今日演奏されるのは、いわゆる3つの楽章を持つ完結した協奏曲ではないが、独奏ヴァイオリンとオーケストラによる独立した急、緩、急の3つの作品を連続して演奏することにより、まるで一つの協奏曲のように構成された面白い試みである。最初に演奏されるのは、「ヴァイオリンと管弦楽の為のロンド 変ロ長調 KV269 (261^a)」。様々な状況証拠から、モーツァルト研究家のA.アインシュタインはヴァイオリン協奏曲第1番変ロ長調の終楽章の代替楽章として書かれたものと結論しているが、この曲の方がはるかに円熟度が高く、この説に対する疑問も少なくない。新全集では作曲年を1775年から77年の間、筆跡や用紙の研究で名高いタイソンは、1976年の作と推定している。題名の通り、ロンドの形で書かれているが、最初に提示されるロンド主題が、ロンド、エピソードなどあらゆるところで顔を出すため、主題の晴れやかで楽しげな性格が全体に横溢する作品である。

つづく「ヴァイオリンと管弦楽の為のアダージョ ホ長調 KV261」は、自筆譜に1776年という明確な作曲年の記述がある。そのため、1777年の9月と10月に父レオポルトが旅先のモーツァルトに宛てた手紙の中で「ブルネッティ（ザルツブルク宮廷楽団のコンサートマスター）のためのアダージョ」と記している作品と考えられている。管弦楽書法も優れ、高貴な叙情と深い内容を持つソナタ形式による名品であることから、同じ調性で書かれたヴァイオリン協奏曲第5番の緩徐楽章の代替楽章として書かれたものではないかと推定されている。3曲目の「ヴァイオリンと管弦楽の為のロンド ハ長調 KV373」は、1781年3月に、ザルツブルクでの主君であるコロレド大司教によって、滞在中であったミュンヘンからウィーンに呼び戻されたモーツァルトが、コロレドの求めに応じて、ウィーンの貴族たちに聴かせる作品の一つとして作曲した作品である。ロンド主題が独奏ヴァイオリンによって提示される、協奏曲によく見られるロンドの形式で書かれており、流麗で軽快なモーツァルトならではの個性が縦横に発揮された傑作である。

W.A.モーツァルト：ディヴェルティメント 二長調 KV334(320^b)

Wolfgang Amadeus Mozart : Divertimento für zwei Hörner, zwei Violinen, Viola und Baß D-Dur, KV334(320^b)

これは「ディヴェルティメント」と名付けられた作品のなかでも最も素晴らしい作品といってもよい傑作である。1779年から1980年にかけて、ザルツブルクの名門貴族ロビニエ家の息子のジークムントが、ザルツブルク大学の法科の最終試験に合格したことを祝って演奏されるフィナーレ・ムジークとして作曲されたのではないかと考えられている。2年前の前作「ディヴェルティメント 二長調 KV.287」と同じ楽器編成（ヴァイオリン2、ヴィオラ、バスと2本のホルン）を持つが、音楽のスケールも内面的な豊かさもさらに一層大きくなり、ザルツブルク時代に作られた作品のなかでも最高傑作といっても過言ではない。特に第1ヴァイオリンに与えられた表現の深さ、重さは並みではなく、演奏者にも大きな充実を要求する。

構成的にも「ディヴェルティメント 二長調 KV.287」と全く同じ6楽章。どの楽章も、どんな言葉も無力にならざるをえないほどの圧倒的な感銘と深い含蓄にみちているが、とりわけ二短調を主調とする第二楽章の深い哀しみに彩られた音楽を何と形容したらよいだろう。ここには人間という存在の哀しみから決して目をそむけず、しかしそれを赤裸々に大声で言いたてるのではなく、慈しみのこもった目で暖かく包み込んでしまうような大きさや深さがある。第三楽章のメヌエットも彼のメヌエットのなかで最もよく知られているものの一つ。ここでも独特の哀しみを帯びた翳りがやるせない情感を表出する。他の楽章も前述の二つの楽章と甲乙付けがたい素晴らしさで、まさに比類のない傑作といえるだろう。

指揮・ヴァイオリン独奏

ライナー・ホーネック

第1ヴァイオリン	萩原 合歓	前川 友紀	谷口 朋子	幸田 さと子
第2ヴァイオリン	西尾 恵子	井上 隆平	黒江 郁子	中山 裕子 奥野 敬子
ヴィオラ	亀井 宏子	中島 悦子	横井 和美	
チェロ	伝田 正則	田中 次郎	山本 彩子	
コントラバス	長谷川 順子			
フルート	中川 佳子	奥田 裕美		
オーボエ	中根 庸介	土井 恵美		
ホルン	日高 剛	中川 直子		

<プロフィール>

ライナー・ホーネック
Rainer Honeck



1961年オーストリア生まれ。1981年ウィーン国立歌劇場/ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に第一ヴァイオリン奏者として入団、1984年には同歌劇場管のコンサートマスター、1992年にはウィーン・フィルのコンサートマスターに就任。ソリストとしてはM・ヤンソンス指揮ウィーン・フィルとドヴォルザークの協奏曲、D・ガッティ指揮ウィーン・フィルでベルクの協奏曲、R・ムーティ指揮のもとモーツァルトの協奏交響曲等を協演。録音では、小澤征爾指揮リムスキー=コルサコフ「シェヘラザード」、クリスティアン・ティーレマン指揮R.シュトラウス「英雄の生涯」、またドヴォルザーク/メンデルスゾーンの協奏曲をプラハにてチェコ・フィルと録音、シューベルトのヴァイオリンとピアノの全作品、モーツァルトの協奏曲2枚組などがある。

室内楽では1989～1999年ウィーン・ヴェルトウオーゼンの創立メンバー、1982～2004年ウィーン弦楽トリステンのリーダーとして活躍、2000年以降は、アンサンブル・ウィーン、ウィーン・ベルリン室内管弦楽団でも活発な活動を行う。近年では指揮にも力を入れており、名古屋フィル、紀尾井シンフォニエッタ、読売日本交響楽団、マルメ交響楽団などに招かれている。

オーストリア国立銀行貸与の1709年製ストラディヴァリウス“ex-Hämmerle”を使用。

神戸市室内合奏団
Kobe City Chamber Orchestra



1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に、質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また、定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で、演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮によるJ.S.バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演はCDとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的發展を目指して、新たな活動を開始した。